

長野松代・善光寺宣言

第41回全国町並みゼミ長野松代・善光寺大会は、「町並みを守って歴史文化のまちづくり」をテーマに、全国から400人が集まり、次の50周年へ向け、その第一歩にふさわしい成果をあげた。次の10年のテーマは、第40回名古屋有松ゼミで宣言した「町並みは私が守る」。私たちは、その実践やあり方について、長野松代そして善光寺で多くを学んだ。

1日目、西村幸夫神戸芸術工科大学教授が「日本における町並み保存の歴史と今後の展望」と題して記念講演を行なった。同教授は、明治以降の歴史保存が、時代の変化に対応して展開して来た経過を振り返り、少子高齢化・人口減少という現在の変化が、従来の外からの異質なものの侵入とは異なる内部からの崩壊であると喝破した。同氏はまた、1981年にたずさわった松代の町並み調査で見出した武家屋敷の池をつなぐ泉水路のシステムが、庭園都市・松代の歴史的環境を維持・継承する鍵になると指摘した。

新しい変化への対応は、活用の概念を導入した文化財保護法の改正など制度面でも始まっている。今回のゼミでは、各地からの報告に先立ち、来賓の国土交通省の渡瀬知博歴史文化環境整備室長に歴史まちづくり法について講演をいただき、相次いで導入された歴史的建物活用を支援するファンドについて、金融機関から紹介を受けた。

続く各地からの報告では、開催地の夢空間松代のまちと心を育てる会を皮切りに10団体が発表を行った。明らかになったのは、運動のレベルが上がる一方で、「内部からの崩壊」を食い止めることが難しくなっている現状である。竹富島では「ならぬ」と島民が一致団結する観光開発が許可され、各地で重要伝統的建造物群保存地区以外で歴史的建物等が相続などを契機に次々に壊され、行き過ぎた観光化で歴史的資産が損なわれている実態が報告された。

二日目は、5つの分科会が行われ、上記課題へ多くの示唆を得た。「善光寺門前の場合」をテーマとする第一分科会では、空き家・空き店舗のリノベーションを、多様な人材がネットワークを形成し、地域の関わりを大切しながら、行政に頼らず実践する、まさに「私が守る」斬新な取り組みを学んだ。

松代を舞台にした第二から第五分科会は、松代城整備で存続が危ぶまれる松代駅を出発点とする町歩きから始まった。

第二分科会「歴史的景観の保存と継承」では、松代の泉水路のシステムを軸に文化的景観を導入する意味や可能性について、山形県長井市と長野県飯山市小菅という先駆例を学びつつ討論が行われた。第三分科会「歴史的建造物の保存と活用」では、NPOなどが地域に根ざして人間関係を構築しながら適切な活用を推進することが、活用のために重要なだけでなく、災害の迅速な復旧にも繋がることを確認した。第四分科会「歴史文化を活かした観光まちづくり」は、参加者が、松代小学校の民話語りクラブによる紙芝居や体験プログラムなど、松代の人々が取り組むおもてなし活動を体験することから始まった。午後の討

論では「観光地化」と対極の、地域コミュニティの維持・強化を同時に達成する松代の実践が高く評価された。第五分科会「城下町の町並みを活かしたまちづくり」はリノベーションによる空き家の利用を中心テーマに、各地でそれを実践する団体からの報告をもとに討議が行われた。そして外から来た人（風の人）が水の人となり土に浸み込み、地元の人（土の人）と地域の価値を結び直すという理念が共有された。

今回のゼミの開催地となった長野市松代そして善光寺は、私たちが直面する課題を考える上でまことにふさわしい場所であった。

第一に、「町並みは私が守る」実践について多くを学んだ。NPO 法人夢空間松代のまちと心を育てる会、文化財ボランティアの会、エコール・ド・まつしろ倶楽部などの、住民によるさまざまなボランティア活動が、おもてなし活動を実践し、松代まるごと博物館を実現する取り組みに、他者を迎えることがすなわち自らのコミュニティの維持・強化につながるという観光の原点を再確認した。

第二に、重伝建地区の周辺地区や重伝建地区に馴染まない歴史環境の保全の方法について、可能性や限界を学んだ。とくに、重伝建地区か文化的景観かという二者択一を超えて、より包括的な制度の枠組みを構築することが喫緊の課題である。

私たちは、今回の町並みゼミで学んだことを糧に、それぞれの地区での運動に取り組み、次のゼミにいつその成果を持ち寄ることを誓い、右宣言する。

2018年11月18日

第41回全国町並みゼミ参加者一同